第1回　言語的文化的多様性を生きる子ども達の
学習支援者井戸端会議（1st POD）報告資料

2013年6月30日

小中高生の在学・進学のための学習支援の実践課題について

1. 地域の状況
2. 教育の過程で外国人生徒に起きている問題
3. 教育の過程で外国人生徒に起きる「問題の連鎖」
4. 学習支援活動の実践
5. 実践上の課題
6. 実践に思うこと、いろいろ

いせさきNPO協議会 社会貢献ネット
理事　本堂晴生

1. 地域の状況

- 伊勢崎市は群馬県で最も定住外国人が多い（約1万人）。
  国籍は、ブラジル、ペルー、フィリピン、ベトナムの順。

- 彼らの子どものうち約900人が日本の小中学校に在学。
  高校進学率が近年増加傾向。

- 正確な統計はないが、在学していても授業が理解できない、不登校気味、時には中退などがある。また、経済的理由などで不就学の児童生徒がいる。

群馬県伊勢崎市の外国人定住の状況

定住外国人の数　　10,070人（2013年4月末）

外国人児童生徒の数

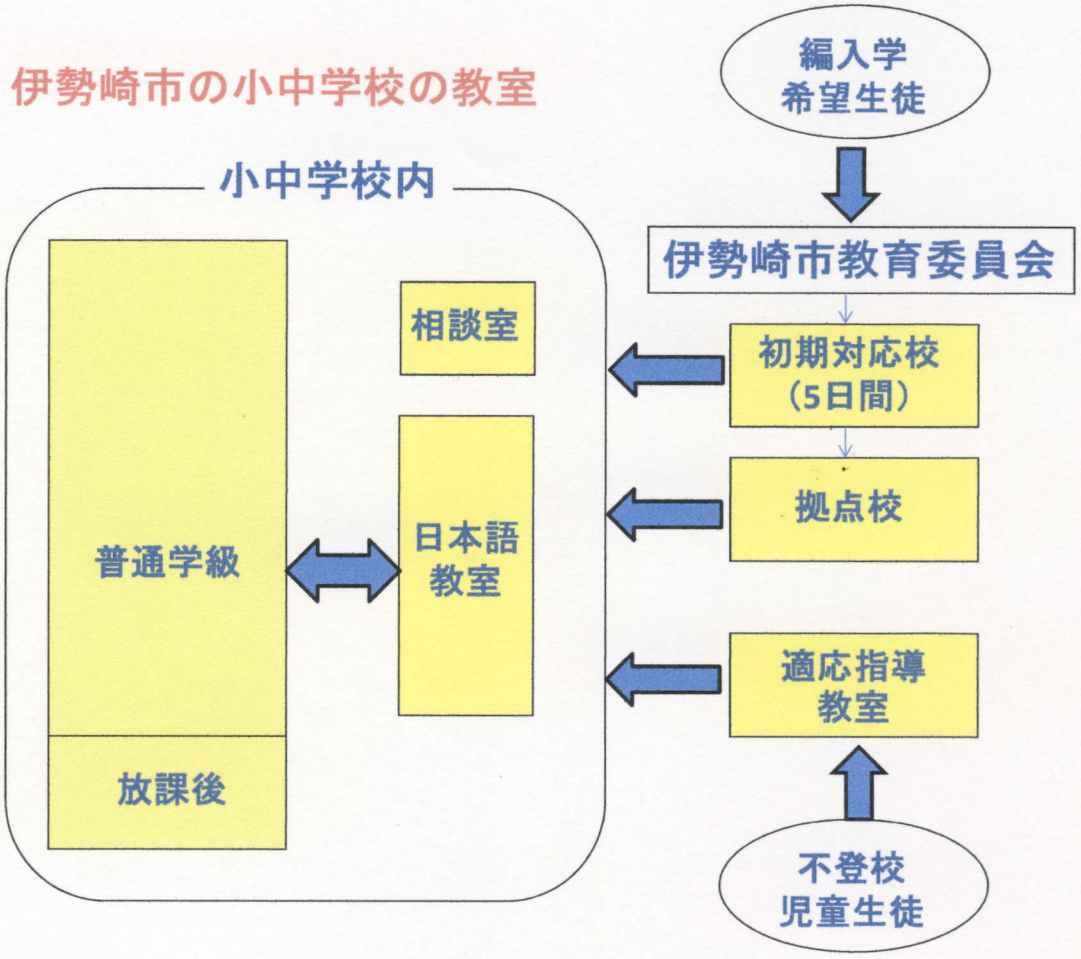
　公立小中学校　約940人

　外国人学校（市外校への通学含む）　？

　不就学　　？

外国人生徒の高校進学　増加傾向

伊勢崎市の小中学校の教室



2. 教育の過程で外国人生徒に起きている問題

■　母国で生まれて途中で来日や、日本と母国の間を行ったり来たり、また、日本でも日本の学校と外国人学校を行ったり来たりで、日本語力（漢字、読解力）が不充分。

■　親が日本語や日本の学校について知識が不十分で、宿題など相談に乗れず、子どもが授業について行けなくなることがある。

■　日本と母国での学校制度の違いから、在学9年間（高校受験に必要）や12年間（大学受験に必要）に満たず、受験できない。
　在学期間が不足のタイミングで来日し、日本に慣れる期間を過ごしているうちに過年齢で中学に編入できず。

外国人児童生徒の教育歴に関わる移動のケース

- 母国で生まれ途中で来日
- 日本で生まれ公立小中校に在学・進学
- 日本と母国を行ったり来たり
- 日本の小中学校と外国人学校を行ったり来たり

教育の過程で外国人生徒に発生している問題(1)

母国で生まれ途中で来日

ペルーの学校で習ったよ

小学校	中学校	高校	専門学校・大学	就業

日本語力がゼロなので、日本の小中学校に**すぐの入学・編入手続きをせず、慣れる期間を持とうとする** → 入学・編入の遅れもしくは時機を逸する

日本語が不十分なため**授業が理解できない・ついていけない** → 不登校・中退になりがち

母国の学校制度が異なるため在学9年間（高校受験に必要）や在学12年間（大学受験に必要）に満たず、**受験できない**

日本と母国の学校制度の違いを知らないため**来日するタイミングが進学に不適当**で、不必要な苦労を子どもが負うことになる

→ 高校や大学を受験するには、まず、中学校卒業程度認定試験・高校卒業程度認定試験に合格する必要がある

教育の過程で外国人生徒に発生している問題(2)

日本で生まれ日本の小中学校に在学

わたしは日本人。日本語は話せるよ

小学校	中学校	高校	専門学校・大学	就業

親が日本の学校をよく知らなかったり、宿題など日本語による勉強をサポートできないので、**子どもは親に勉強を相談できない** → 何かのきっかけで学校での勉強に遅れが出て授業についてい行けなくなることがある

小中学は学力不足でも進級・進学できるので、**小4の壁、中学の壁を越えられず授業についていけない** → 不登校・中退になりがち

自分の**アイデンティティがわからなくなる**ことがある → 親を尊敬しなかったり、攻撃したり、母国文化を蔑視したりすることがある

教育の過程で外国人生徒に発生している問題(3)

日本と母国を行ったり来たり

いつもお母さんと
いっしょ

小学校	中学校	高校	専門学校・大学	就業

↑↓↑↓↑

母国の学校

母国と日本の学校を行ったり来たりなので、**年齢相応の学力がつかない** → 不登校・中退になることがある

日本語と母国語の**両方が中途半端になることがある** → 抽象概念を考える力が中途半端になるかもしれない

教育の過程で外国人生徒に発生している問題(4)

日本で小中学校と外国人学校を行ったり来たり

親が母国に帰るか
日本に「定住するか
迷っているため

小学校	中学校	高校	専門学校・大学	就業

↑↓↑↓↑

外国人学校

もうすぐブラジルに
帰るから日本語
勉強する気にならないよ

外国人学校と日本の小中学校を行ったり来たりなので、年齢相応の学力がつかない → 不登校・中退になることがある

3. 教育の過程で外国人生徒に起きる「問題の連鎖」

- 学力不足の連鎖による深刻化：

小学校での学力不足が中学校で顕在化
（その段階で不登校、中退になることがある）

↓

在学継続し中学を卒業
（高校に進学できず就業の子もいる）

↓

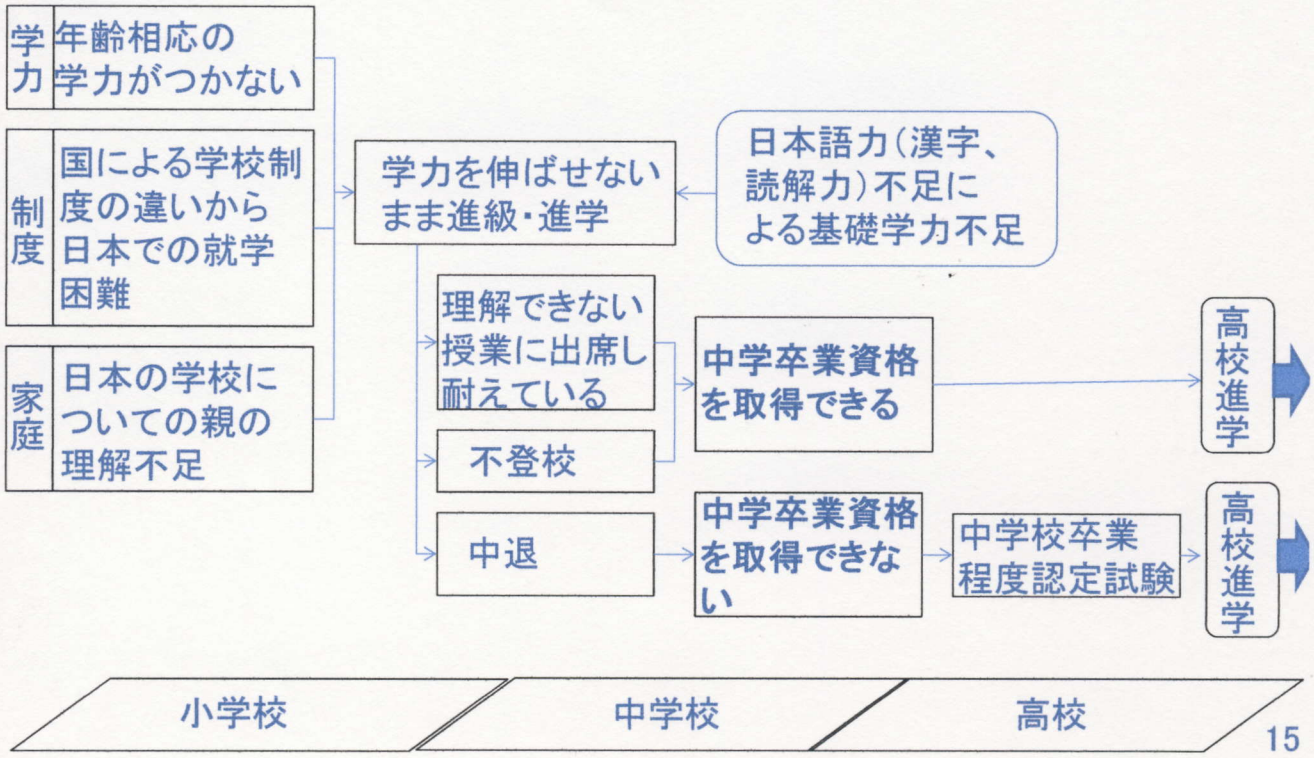
高校に進学
（高校の授業について行くのが困難な子がいる。
この段階で不登校、中退がある）

↓

あとになるほど挽回の選択肢が狭まる

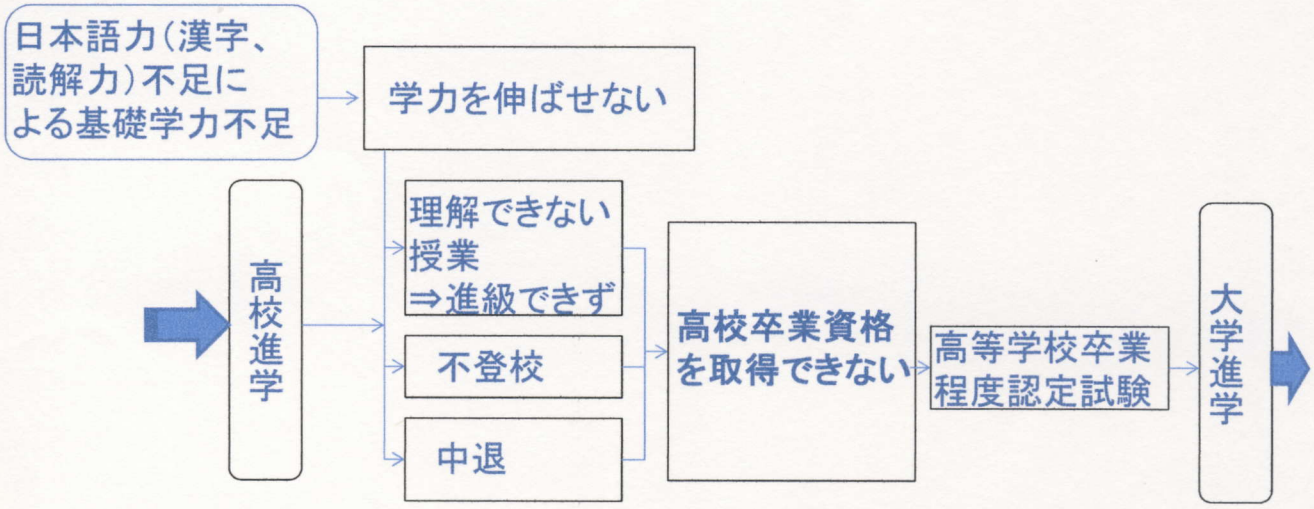
教育の過程で外国人生徒に発生している問題の連鎖(1)

～ 問題の繰り上がり ⇒ 問題がより深刻化 ～

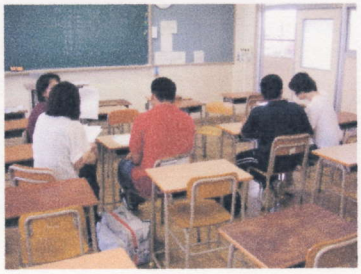


教育の過程で外国人生徒に発生している問題の連鎖(2)

～ 問題の繰り上がり ⇒ 問題がより深刻化 ～



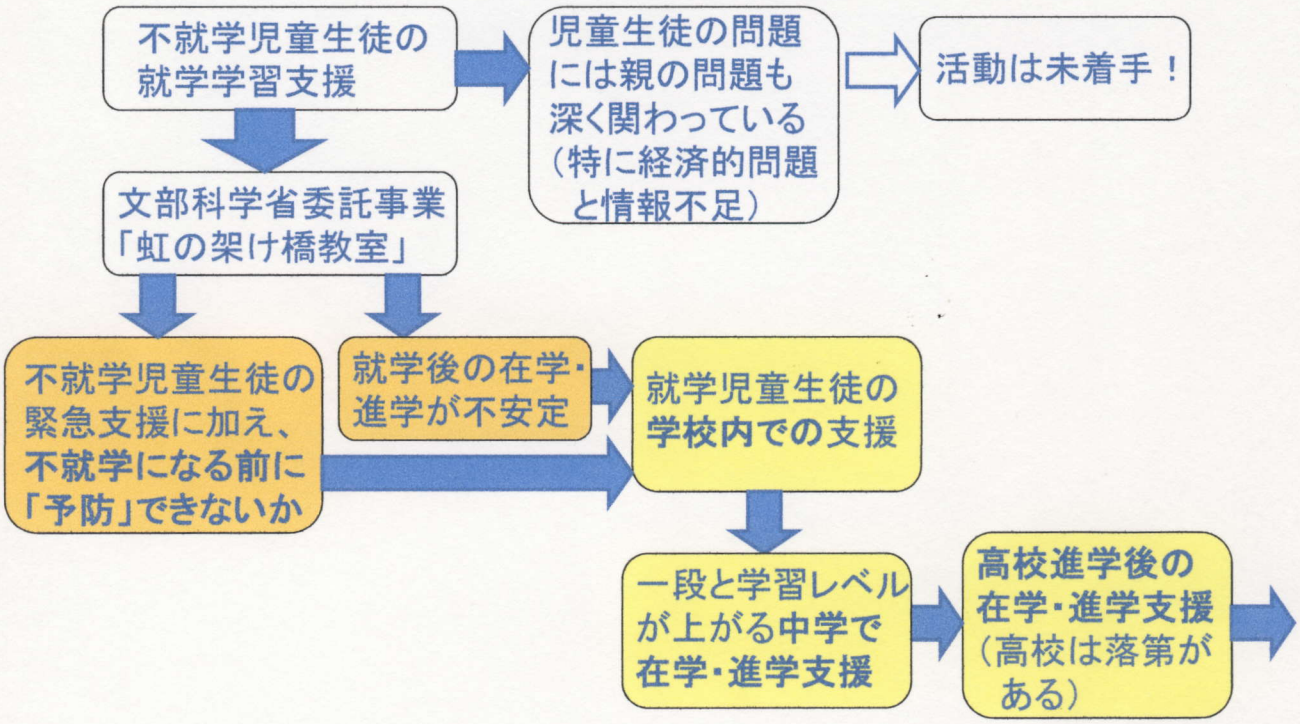
4. 学習支援活動の実践
～「支援」は「自立」の支援　～



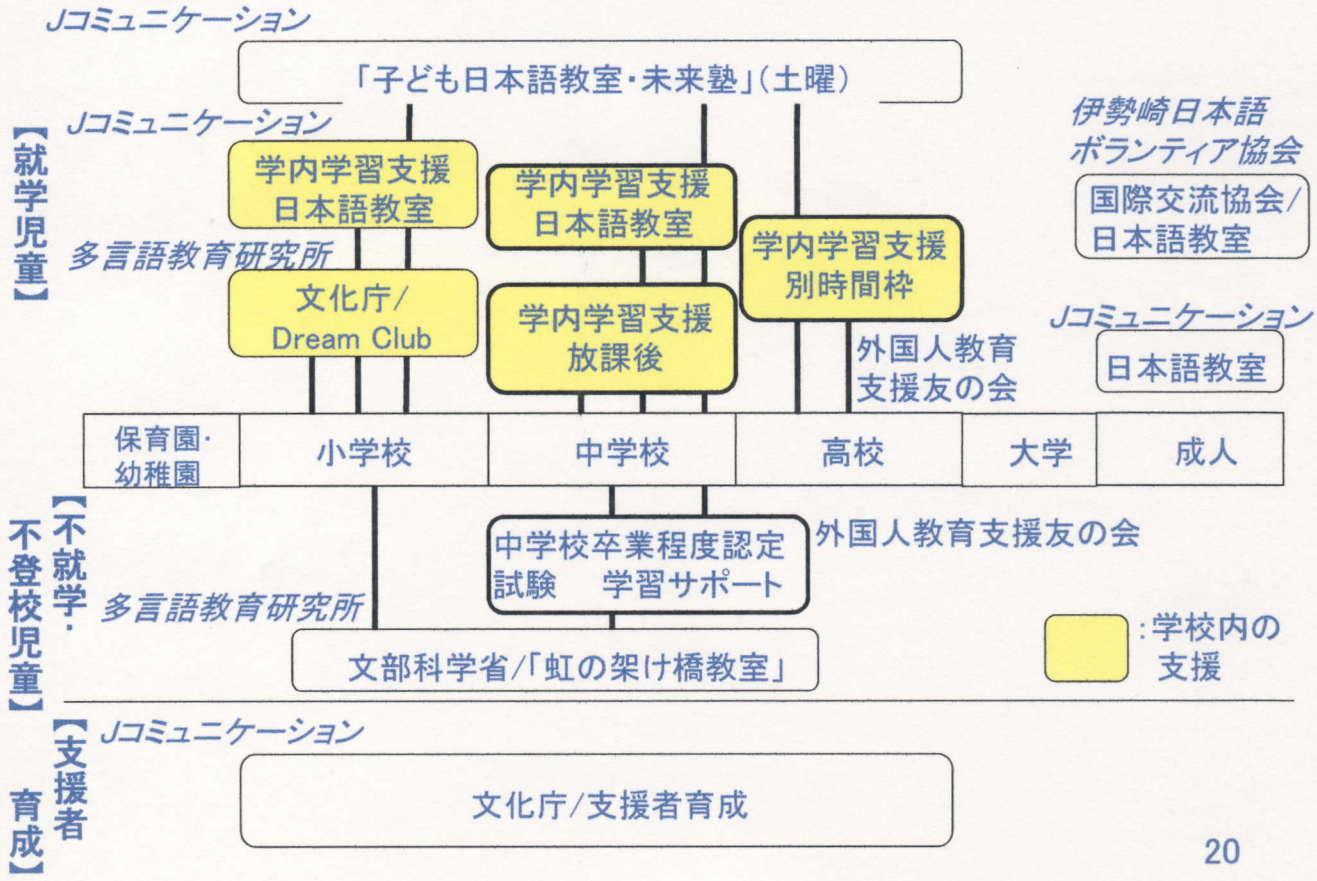
- 日本語（漢字、読解力）と教科の並行支援：
  教科に使う日本語を習得しつつ、教科の基礎内容も学ぶことで、自分で勉強をする力をつける
- 自分を認めてくれることによる「やる気」アップ：
  支援の場は、学習の場であると同時に「居場所」でもある

学習支援
＋
自分を認めてくれる居場所
→
自立支援

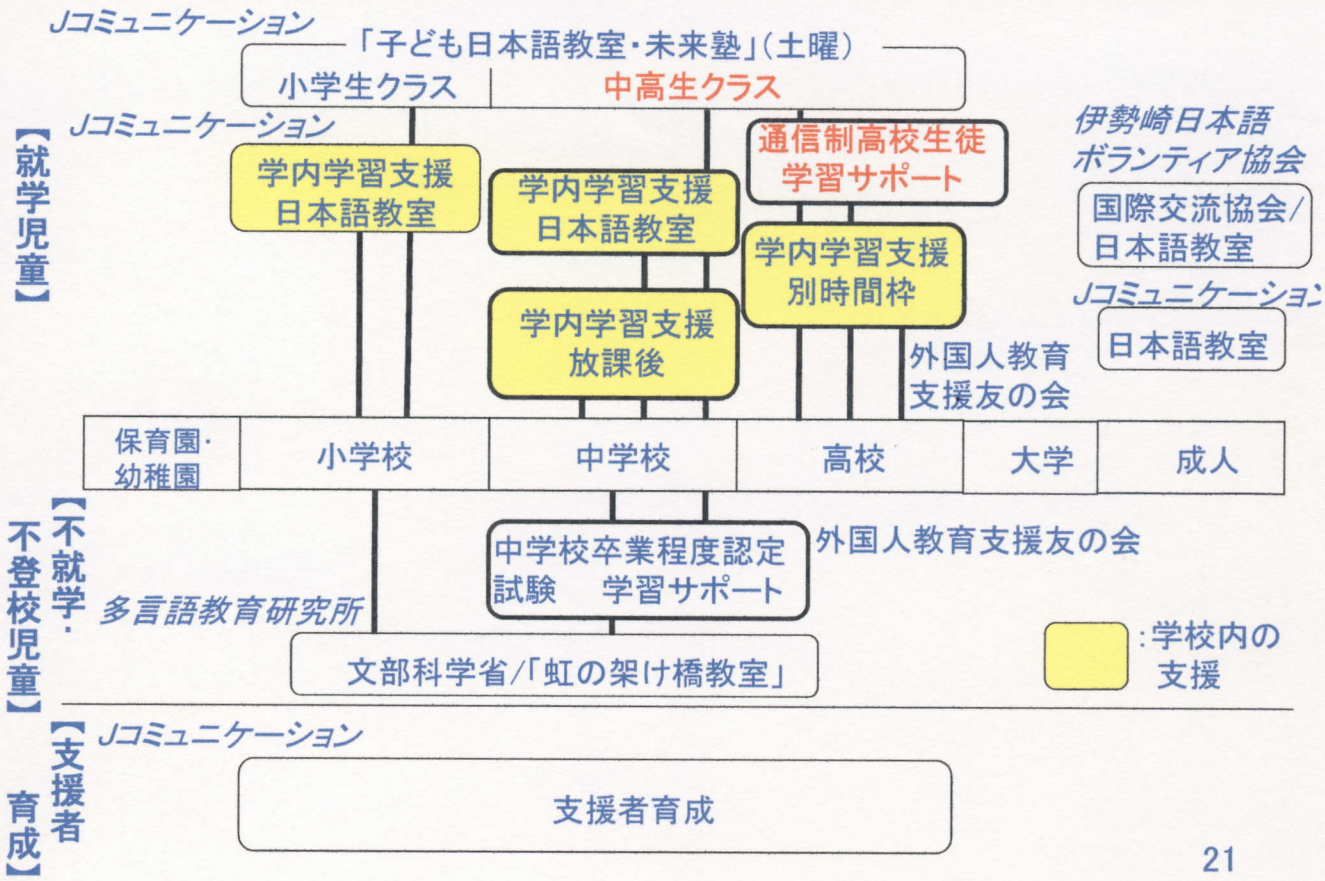
支援体験から生まれた「生徒の人生の流れに沿った自立支援」



伊勢崎地域のNPOによる外国人児童生徒学習支援（平成24年度）

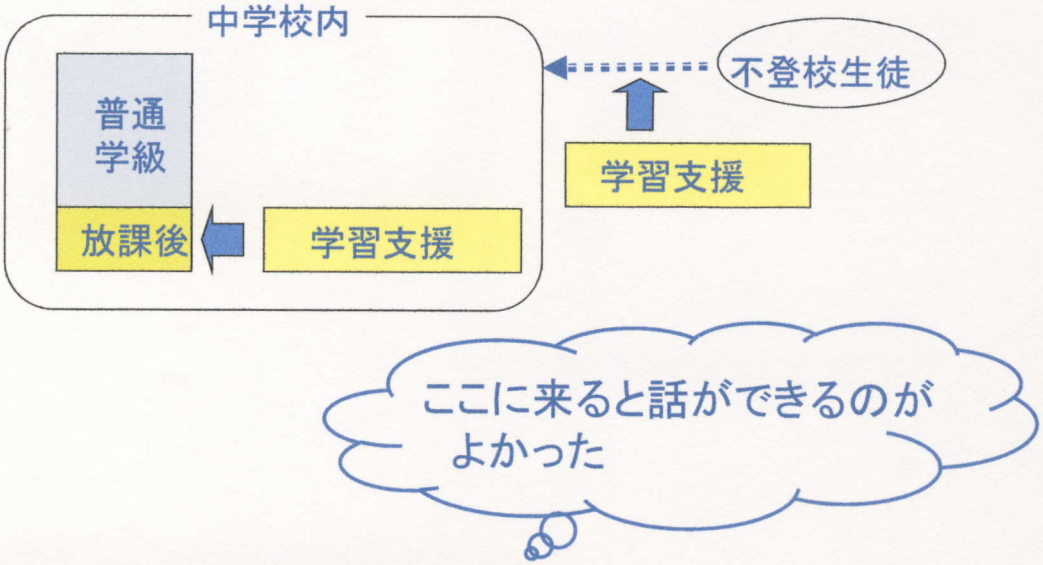


伊勢崎地域のNPOによる外国人児童生徒学習支援（平成25年度）



主な学習支援活動　-1

学校内活動：中学校内における放課後学習支援



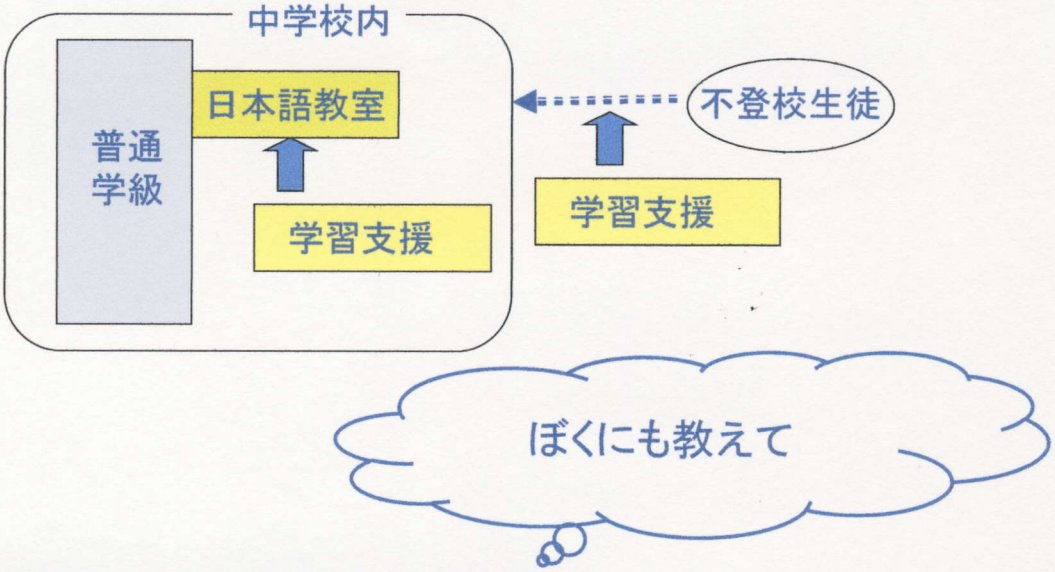
☆2012年度実施状況　週3回、放課後1時間半

対象生徒	支援者	実施期間	実施回数	結果
5人⇒3人	2～3人	5月～翌年3月	75回	個々の生徒の状況に合った支援

別に、学校と連携し不登校気味生徒1人を朝学校内で支援⇒県立高校通信制に入学

主な学習支援活動 -2

学校内活動：中学校内における日本語教室学習支援



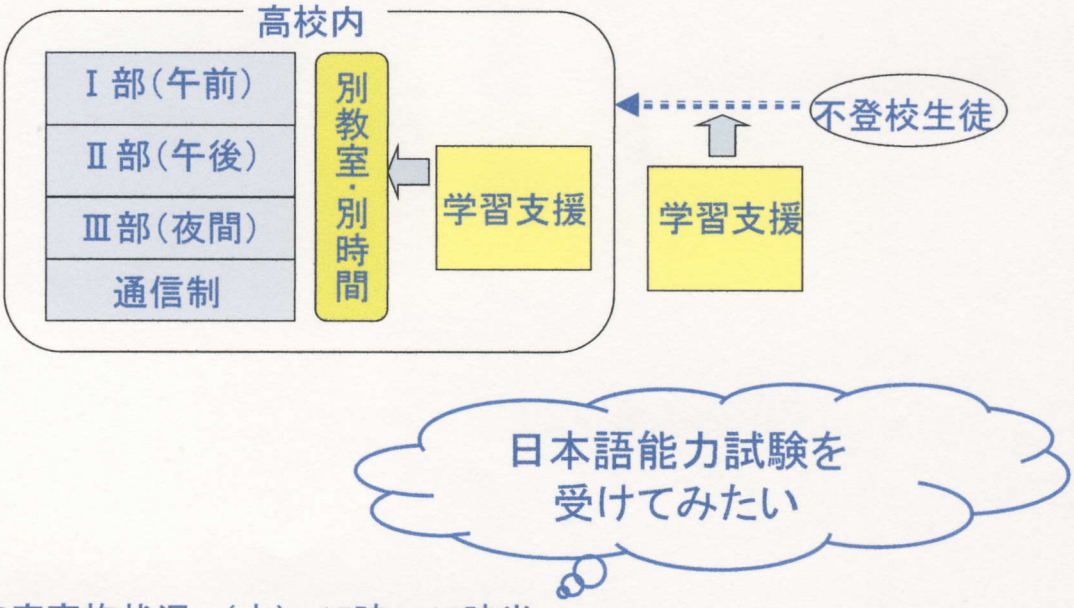
☆2012年度実施状況　週3～4回、各1～2時限分

対象生徒	支援者	実施期間	実施回数	結果
9人	1～3人	5月～翌年2月	88回	個々の生徒の状況に合った支援

別に、学校と連携し学校外にて不登校生徒1人を自宅訪問で支援⇒県立高校に入学

主な学習支援活動 -3

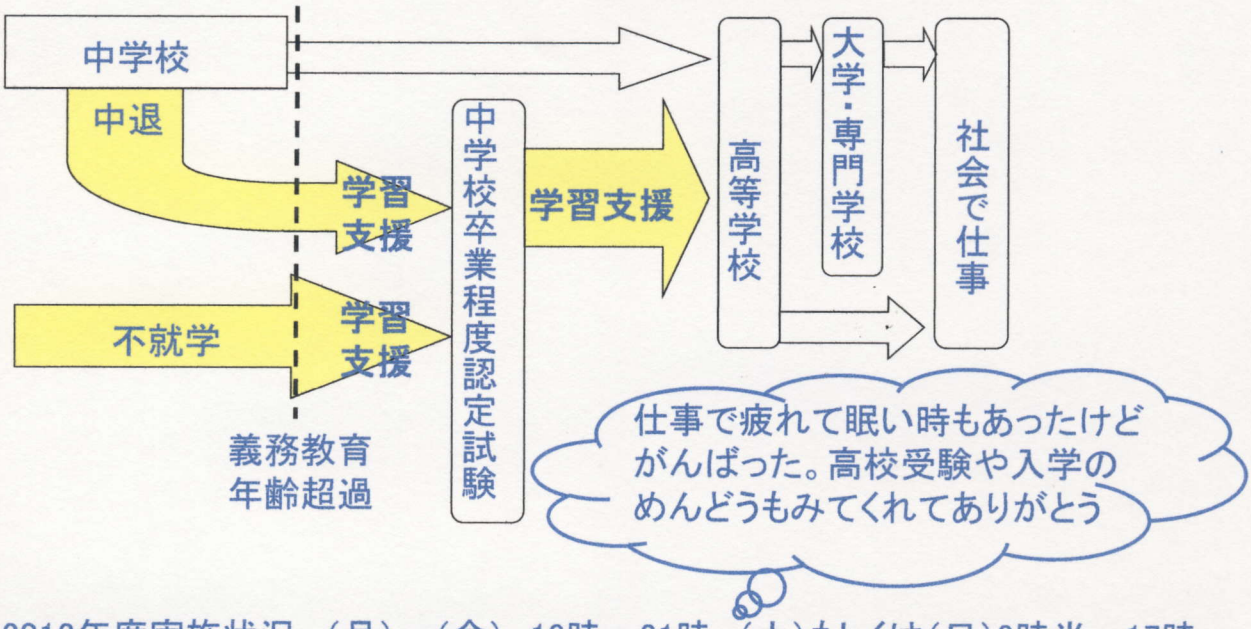
学校内活動：高校内における別時間枠での学習支援



☆2012年度実施状況　（水）　15時～17時半

対象生徒	支援者	実施期間	実施回数	結果
10人⇒4人	2～3人	7月～翌年1月	29回	漢字、読解力、作文力の向上

主な学習支援活動 -4
学校外活動：中学校卒業程度認定試験の学習支援

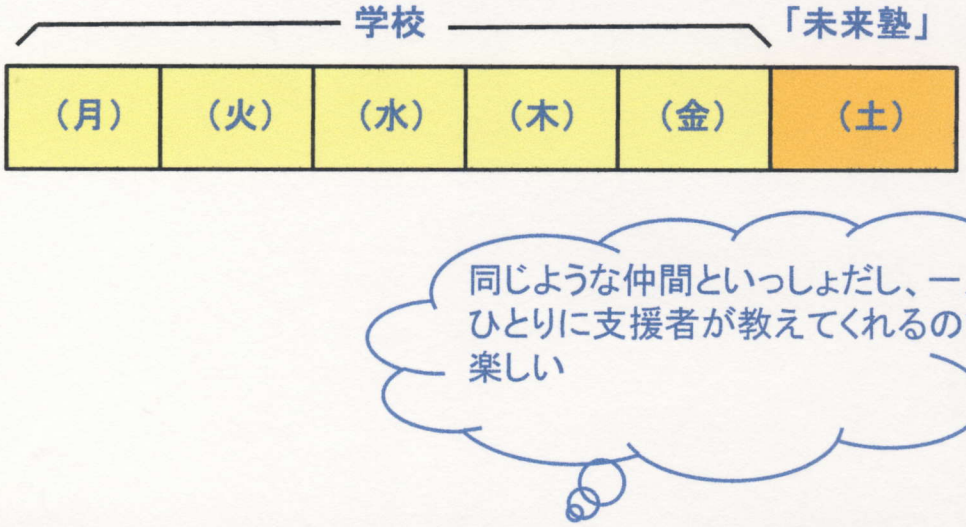


☆2012年度実施状況　（月）～（金）　19時～21時、（土）もしくは（日）9時半～17時

対象生徒	支援者	実施期間	実施回数	結果
3人⇒2人	4人～5人	4月～翌年3月	328回	2人は一発合格。N2、N3取得各1人

平日の日中は仕事をしているので、平日は夜間の支援。及び（土）（日）支援

主な学習支援活動 -5
学校外活動：土曜日の学習支援



☆2012年度実施状況　（土）午前9時半～11時半　人数：登録数（平均参加数）

対象生徒	支援者	実施期間	実施回数	結果
38人（15人）	16人（8人）	4月～翌年3月	44回	学習以外にショー＆テル、バス体験も

平成25年度から午後を中高生クラスとして増設。5月から実施開始済。

5. 実践上の課題

- 関係ゼロの状態から教育委員会、学校との信頼関係作り、そして地域の大学、企業、住民も含めたネットワークをどう作っていくか。

- 子どもの人生に寄り添いかつ自立を支援するには、関わることになった一人ひとりの状況を継続的に把握することが必要。

- 支援者集めがなかなか大変。外国人児童生徒の状況を知ってもらい、支援の意味と自分にとってのメリットの理解を共有することが有効のよう。

実践上の課題1:
市教育委員会・校長先生との信頼関係構築

～ トップダウンを活用したボトムアップ活動 ～

人と人のつながり

関係ゼロからのスタート

- 文部科学省・文化庁委託事業を通して関係構築 ― 市教育委員会における前向きな人の存在
- コミュニケーションを密に取りながら信頼関係構築と活動実施 ― まず教育委員会から校長先生に話を通していただく
- 信頼関係を基に新たに中学校内での支援を提案・実施 ― 学校側との定期的なコミュニケーション（毎回の支援記録、学期末報告、年度末報告）

今後の課題1: 人と人の関係が基本であるが、**持続的な支援には仕組み作り**が必要
（教育委員会、行政、学校、大学、保護者、生徒、地域住民、企業、NPOのネットワーク）

実践上の課題2:
生徒一人一人の人生の流れに沿う自立支援

～ 「支援」は「自立」のための支援 ～

一人ひとりをフォロー

8才 9才 10才 11才 12才 13才 14才 15才 16才

小学3年 来日 日本の小学校

小学4年 外国人人学校

小学5年 母国に帰国し母国の学校

小学6年 再来日 外国人学校

中学1年 学校に行かず母国の通信教育

中学2年 「虹の架け橋教室」

中学2年 地域の公立中学に編入し卒業（日本語は不充分）

母国に帰国する予定で高校進学せず

日本に定住することになり、翌年通信制高校を受験、合格

仕事をしながら通信制の学習

支援①: 中学就学のための学習

NPO多言語教育研究所

支援②: 高校受験のための学習

NPO外国人教育支援友の会

支援③: 通信制高校の学習支援

NPO Jコミュニケーション

今後の課題2: 生徒の教育履歴データの共有をどのようにするか

実践上の課題3:
支援者をどのように集めるか

～人脈、ネット、外国人生徒の問題と活動意義の周知～

毎週平日の継続支援活動であり、支援者がなかなか見つからず！（苦労中）

初年度（昨年度）に実施したこと

- 近隣の大学に掲示
- ネットに掲載
- 人脈

今年度に実施したこと

問題の共有

- 学生向けに活動の意味とメリットを説明した文書を用意
- 地元大学の熱心な先生と知り合いになれた

今後の課題3-1: 外国人児童生徒の状況と活動の意味を理解いただくことが有効。
今後さらにどのようにそれを展開するか。

今後の課題3-2: 「一本釣り」ではなく仕組み作り～大学内にボランティアサークル

実践上の課題4:
支援の場所による特長を活かす

～ガラス張りで信頼の積み重ね～

100m先を見て1cmずつ

日本語教室	いろいろな生徒がいるので、どういう支援が必要か見える
放課後・別時間枠	支援者側の方法で行なうことができる
学校外	地域・保護者とつながりやすい

今後の課題: 生徒の年間の指導のロードマップ作り

6. 実践に思うこと、いろいろ

思うこと　1

日本で生まれ日本の小学校を経て現在中学生。
学習がすごく遅い。
おとなしい子なので、小学生の時からクラスで目立たず
そのまま進級、進学？
⇒　小学生の時からもっと対処ができていれば。

思うこと　2

心理面の検査とケアが必要な子どもについては、
外国人児童生徒の場合、日本語の不十分さが
心理問題に間違われることがありそう。

心理的問題があった子でもなかった子でも、自分が
関わった子については、成人になるくらいまでは
その子がどうなったかの教育面の情報は継続的に
知ることができるようにしたい。

思うこと　3

「日本語教育」は言語の習得に加え、本来の教育である
「人生の選択肢を広げ、他人の価値を認める」ことも
「日本語教育」でできるようにしたい。

さらには、その子の優れたものを見つけそれを伸ばす
こともできる「日本語教育」であって欲しい。

言語教育は、言語の習得に加え、その言語の基盤と
なっている「ものの考え方」を学ぶことで異なるものの
価値を認められるようになると思う。

「異なるもの」の価値を認めることがグローバル人材の
育成になると思う。